

「朔く今日は私と遊んでくれるよね？最近付き合い悪いじゃん！」

「え、今日は私にとって約束したよ！そうだよね朔？」

キヤーキヤーと甲高い声を上げる女の子を侍らせて取り合いをされて、この世のものとは思えないほど綺麗な顔をした男を、奈央は遠くから見つめていた。その瞳には羨望や憎悪などの感情を湛えていることはなく、ただただ眺めているような、諦観の瞳だった。

成瀬朔。大学内の人間であれば誰もが知っている、と口を揃えて言うほどの有名人だ。顔が天使のように綺麗なのは勿論のこと、彼を有名人たりえる存在にしているのは彼の女癖の悪さが一番の理由である。

顔の良さで言えば芸能人に劣らないだろうその容姿に寄ってきた女の子を片っ端から抱いては捨てる。基本的にはワンナイトで終わるが身体の相

性が良ければセフレになる、という噂。中にはやり捨てされたと騒ぐ女もいたにはいたが、要領も良く家が裕福な朔は色々な手を使ってそれらを黙らせてきた、らしい。

大学にいる女の子の三分の二は喰ったと噂されている朔に、奈央もまた抱かれていた。

奈央が朔と初めて出会ったのは大学内ではなく、休日の渋谷だった。奈央は特に用事もなくフラッと渋谷に一人で遊びに行った。休日は人も多く、駅を出た瞬間に若干後悔した奈央は、人の波に乗りながら適当に歩いていた。

グイッ

「きゃっ!？」

急に手を引かれて肩を抱かれた奈央は訳もわからずその人を見上げ、目を見開いた。

（成瀬朔…!?）

陽の光が朔の綺麗な金髪を照らしキラキラと輝かせ、白い肌は日焼けという概念を知らなそうな滑らかな質感で、間近で見ても彫刻と見紛うほど異次元の容貌をしていた。

「ごめん、ちよつと黙ってて？」

甘い声でそう囁かれ身体を竦めた奈央が言われた通り静かにしていると、鬼の形相をした女が朔の名前を叫びながら走ってきているのが見えた。

朔と奈央の前で止まった女は息を切らしながらキツと朔を睨みつけ、その後隣にいて肩を抱かれている奈央を見つめて眼光を鋭くさせた。

「朔！もう会えないって何!?てかその女誰よ！私のこと捨てる気!?」

往来で金切り声を上げる女に人の目が集まる。当然相手の朔と奈央にもそれは向けられて、痴話喧嘩か？それとも浮気バレか？と観衆ができそうな雰囲気があつた。

状況が何もわからない奈央は恐る恐る朔を見上げる。柔らかな笑みを浮かべた朔はとても目の前に半狂乱の音女がいるとは思えないほど穏やかだった。奈央の肩をグツと引き寄せた朔が漸く口を開く。

「俺この子と付き合ってるんだよね、本命なの。ただのセフレがキヤーキヤー騒ぐなよ。迷惑だから」

綺麗な顔から発せられたとは思えないほど低い声が響いた。女はひゅつと息を吞んでその場にへたり込んだ。ぽた、と涙が地面に落ちて滲む。

しゃくりあげる女の泣き声が届き、観衆はオチを見届けたと言わんばかり

にその場を後にしていく。

「なんで…っ私のこと好きって言ったじゃん！本命ってなに、意味分かんない！やだ、朔、捨てないでよっ！その子より私の方が可愛いじゃん！」

「はあ…捨てるとか捨てないとか以前にアンタは俺のものじゃないし。好きって言ったのはただのリップサービスだよ、普通に考えたら分かるでしょ。そんなことも割り切れない子とは付き合ってられないんだよね。今度俺の家から連絡させるよ。それで手切れてことで。よろしくね」

へたり込んでいる女に向かってそう言った朔は奈央を引っ張ってその場を後にした。後ろから女の泣き叫ぶ声が聞こえてきて、奈央は耳を塞ぎたくなつたと同時に何でこんなことに巻き込まれているのか、と今度こそ渋谷に來たことを心の底から後悔した。

無言で少し歩いた後、朔は奈央の手を離して向き合った。ニコニコと人

好きのする綺麗な笑顔を浮かべながら奈央に手を合わせる。

「変なことに巻き込んだじゃってごめんね、あの子ストーリーカーになりかけててさあ。今度お礼するから連絡先教えてよ」

しれっと連絡先を聞こうとしてくる朔に奈央は怪訝な顔をしながら一歩身体を引いた。

「：お礼は大丈夫です。いつか刺されそうな人と関わりたくないです：」

「えっ俺そんな風に見える？刺されないように色々手回してるつもりだよ」

「手回してるとか言ってるのも怖いですが：私予定あるので、さよなら！」
「あつちよつと、」

予定など一つもないが、朔から離れるためにそう言って奈央はその場から逃げ出した。噂によると朔に喰われていない女子の方が少ない大学で奈

央はまだその貞操を守っているのである。こんなことに巻き込まれて、私も…！と思うはずもない。

細い道に入った奈央はやつと胸を撫で下ろした。少しだけ上がった息を
ついて、怖くて滲んだ涙を拭う。

（怖すぎ…絶対、二度と関わりたくない…）

そんな奈央の思いも虚しく砕け散り、奈央と朔は大学内で再会してしま
う。

いつも通り奈央が友人である栞と食堂に行くと、そこには普段いない朔
が両腕を別々の女の子に掴まれながら歩いていた。食堂に似つかわしくな
い甘い雰囲気漂わせた朔の周囲は異様な雰囲気を纏っている。

それにいち早く気づいた奈央は栞の手を引いて離れようと歩いた。が、

逆にそれが目立ってしまったのか朔は奈央の方へ目を向け、奈央に気づいた。両腕の女の子を引き剥がし、スタスタと奈央の方へ歩いてくる朔に気づかないまま、奈央は足早に食堂の出入り口へ向かっている。手を引かれている栞だけが朔に気づいて、奈央の足を止めようとしていた。

「ちよつ、ちよつと奈央！来てるって！成瀬朔来てる！」

「え!?そんなわけないでしょ！別の人目当てだよ！早く行こ！」

「いやいやいや絶対こっち来てる！奈央のことガン見だよ!？」

奈央からあの日のことを聞いていた栞は、朔が奈央に気づいたのではないかと、振り返ったり奈央を見たり一人で忙しく首を動かしていた。

「そうだよ、奈央ちゃん目当てだよ」

あの日奈央の耳元で聞こえた甘い声が騒がしい食堂に響いた。栞が奈央

の名前を呼んでいたのが聞こえたらしい朔は奈央の名前を呼んで、足を止めた奈央の前に立った。

「この間はあるがとう、同じ大学だったなんて驚いたな」

奈央の背に合わせるように屈んだ朔は、隣の栞に会釈してから奈央と目を合わせた。栞は間近で見た朔に頬を染めている。モデル顔負けの綺麗な顔に笑いかけられたら当然の反応である。

「：とんでもございません」

「堅っ、ねえこれも縁なんだから連絡先くらい教えてよ。お礼させて？」

堅苦しい敬語で謙遜する奈央に笑った朔がスマートフォンを取り出して、トークアプリを開きQRコードを奈央の前に差し出した。隣の栞はとつくに朔に、というか朔の顔面にメロメロしていて逃げることはできなさそうだと感じた奈央は仕方なくスマートフォンを取り出した。

QRコードを読み取り、友達欄に朔の名前が新たに追加される。沈んだ目でそれを見ている奈央のトーク欄に朔からスタンプが送られてくる。女の子が好きそうなかわいい動物のスタンプ。

「奈央ちゃんって何年生？」

「二年、です」

「じゃあ一個下だ。俺三年。楽単とか知ってることなら教えるから遠慮なく連絡してね。お昼時間短くなっちゃうしお礼に関してはまだ連絡するよ。またね」

そう言ってきた道を戻っていく朔をぼーっと見つめていると、栞が奈央の身体をガクガク揺らして叫んだ。

「奈央！成瀬朔と結構仲良くなってたの!?今度顔写真送って！」

「いや…仲良くなってる…栞は面食いすぎだよ…女癖の悪さ忘れてる

の：あの時もすごかったんだから：

「女癖は別にいいの！彼女になりたいわけじゃなくてあの顔面は国が守るべき宝なんだから！」

「変な子だよ：

面食いかつ推し事が好きな栞は入学してすぐ朔の顔ファンになった。彼女になりたいわけでも抱かれないわけでもなくただただあの顔面を眺めていたいと言う子で、朔に群がる女の子の気が知れなかった奈央にとっては逆に仲良くなれた、という経緯がある。

「お礼の話、また聞かせてよ！ついでに顔写真もお願いね！」

「写真欲しすぎでしょ：

推しと繋がるのはちよつと：という美学？を持っている栞だが、友人経由で何かをするのはセーフらしい。奈央は「良いつて言われたらね」とや

や興奮気味な葉を落ち着けて食堂を出た。食堂で食べるつもりだったが朔が近くにいたのがなぜだか居心地悪かった奈央は、二人でコンビニへ向かった。

奈央の元に朔から連絡が来たのはそれから二週間経ってからだった。既に朔の存在を忘れかけていた奈央は、その連絡を見て「はあ…？」と言葉を失った。

『奈央ちゃん久しぶり、遅くなってごめんね。来週の土曜日空いてたらデート行こうよ。なんでも奢るからさ』

『デートですか…？』

『うん。嫌？』

『嫌というか…写真撮らせてくれるなら良いですよ』

『写真？別に良いけど…？』

栞のことを思い出した奈央はそれを条件にデートの誘いに乗った。日時や待ち合わせ場所を決めて、トーク画面を閉じる。ふう、と息を吐いた奈央はベッドに寝転んで天井を見上げた。

大学一番の有名人で女癖最悪の先輩とデート。奈央の脳内はグルグルと回っていた。ミーハーな心と、もしそういう雰囲気になってしまったらという恐怖で揺れる。

奈央として今時の人間であり、朔の顔を綺麗ではないと思うほど逆張りな人生を送ってきているわけでもない。あの顔面に迫られて拒否できる人間がこの世にどれくらいいるのか、と少し眠気に襲われてふわふわした思考で奈央は考えていた。

（まあ、あんな人が私みたいな平凡な女に迫ってくるわけないか）

変なことを考えた頭を振ってうつらうつらしていた目を覚ました奈央は、ベッドから降りてシャワーを浴びるために浴室へ向かった。

それから一週間はあつという間に過ぎた。大学での朔はいつもと変わらず女に囲まれ、その中心で柔らかい笑みを湛えている。目の前では女同士の取り合い合戦がなされているというのに止める素振りもない。しばらくしてそれが激化してくると、手を伸ばして喧嘩している二人を抱きしめ耳元で何かを囁く。すると顔を真っ赤にして蕩けた瞳になった二人が朔に絡みつく。静かになった代わりに甘く重い空気が充満するのだ。

このように風紀を乱しまくっている朔だが、頭も要領もいいため遊びに遊んでいるにも関わらず大学内でもトップクラスの成績を誇っている。そのため注意しようにもできない空気感が出来上がっていた。教員にまで手

を出しているという噂もあり、朔の話題はいつも大学内を賑わせていた。

「明日ついにデートだねー！どうだったか感想よろしくっ」

「デートとか何するのって話だよ：当日のお楽しみって何も教えてくれないしちよつと怖い、かも」

「大丈夫だよ！奈央可愛いし、自信持って！嫌ならすぐ逃げればいいんだから！ねっ？」

「私の顔は関係ないよお：」

奈央が涙目になりながら栞に明日の相談をしていると、奈央の背後に誰かが立ったのか影が落ちた。急に薄暗くなったのに奈央が振り返ると、そこには珍しく一人の朔が立っていた。

椅子をガタガツと揺らして立ち上がった奈央は慌てて栞の方へ逃げた。ビクビク震えている奈央に笑った朔が奈央の座っていた椅子に座って

奈央を見上げた。

「そんな怖がらないでよ、傷ついちゃうなあ」

「ごつごめんなさい、急だったのでびっくりして…」

「…いつ見ても最強の顔面してるわ」

奈央の隣にいる栞はいつも通りの反応をしており、奈央は一人焦りながら目を彷徨わせていた。ニコニコといつものように笑っている朔は、栞の後ろにいる奈央に向かって手招きする。

「明日のことでちよつと話したかったただだよ、顔だけでも見せてく？」

「は、はい…」

柔らかい雰囲気を纏った朔に少しだけ肩の力が抜けた奈央は恐る恐る前に出た。朔は目を輝かせ、一瞬の間で机越しに奈央の手を握った。肩を震わせた奈央が反射的に逃げようとしてもその手が離されることはない。

「なっなに!? 離してください…っ」

「まあまあ。明日なんだけどこのカフェ行こうと思つてて、奈央ちゃん嫌いな食べ物とかない？」

奈央の手を握つてすりすり指を這わせる朔は、そのまま明日の話を始め。混乱しながら顔を赤くしている奈央は、それに「はひっ？」と反応することしかできず、頼みの綱であつた栞はオタク魂を爆発させているせいで全く使い物にならなかつた。

「オツケー、それじゃ明日二人で予約しとくね。楽しみにしてる」

「んえ…!? はい…? よろしくお願いしますっ」

握つていた奈央の手を持って指にキスをした朔は、ひらひらと手を振りながら去つていった。「えっ、え!?」と未だ何をされたかあまり理解していない奈央は栞の「キヤーツ♡」という歓声で我にかえつた。ブワツと既

に赤かった顔をさらに赤くさせた奈央は涙目なりながら栞に抱きついて呻いた。

（あんな慣れてる人とほんとに明日二人で会うの：!?経験の差がありすぎて怖い：）

朔の顔面力を浴びて完全にオタクと化している栞をガクガク揺らして正気を取り戻させた奈央は、椅子に座り直した。

朔に握られた手が未だに熱を持っていて、奈央は無意識にその手をもう片方の手でぎゅっと握った。身体が浮くような初めての感覚にぼんやりと指先を擦り合わせている奈央に栞から声がかかる。

「奈央、友達だから言うけど本気になっちゃダメだからね？あの顔面国宝は眺めるのに留めておいた方がいいよ。明日のは思い出にして、奈央が傷つくのは嫌だから」

「：うん、分かった」

栞の言葉で少しだけ思考を落ち着かせた奈央はゆっくりと深呼吸をして、明日そういう雰囲気になっても絶対に断ろうと意気込んだ。

デート当日、待ち合わせ場所に向かった奈央は女性の騒がしい歓声を聞いて目をため息をついた。目の前には人ばかりができていて、周りには声をかけずともその中心にいる人物の顔を鑑賞している人もいる。

（あれだけ顔がいいと逆に大変そうだなあ：）

奈央が遠い場所でナンパやスカウトに対応している朔を眺めていると、バチツと目が合った。周りの人をかき分けて奈央の方に足を進めた朔は、奈央の手を取った。

「待ってたよ奈央ちゃん。ごめんね、声かけづらかったでしょ」

「いつ、いえ、こちらこそ遅くなっちゃってすみません」

「全然。行こ、カフェちゃんと予約してるから」

自然に握られた手を引かれて歩いていく奈央に周囲の視線が突き刺さる。無意識に手に力を込めて俯いてしまった奈央に気づいた朔が一度立ち止まって顔を上げさせた。

「今日の奈央ちゃん大学の時よりキラキラしてる。俺のためのおしやれしてくれて嬉しい、可愛いよ」

「ふえ…？」

手の甲にキスをしてにこ、と笑った朔に周囲の女性たちがきやああ♡と声を上げた。

「自信持って、奈央ちゃんは可愛いよ」

そう言ってまた歩き出した朔に着いていきながら、奈央は胸がきゅつと

なるのを感じていた。少し褒められただけで顔が熱くなり、手が震える。
（だめだめっ！この人は遊び人で、こんなこと誰にでも言ってるんだから！）

そう思っているにも、恋愛経験のない奈央はその些細な褒め言葉をすぐに忘れることなどできなかった。隣を歩く天使のように綺麗な男から発せられる言葉は、消えることなく奈央の中に降り積もる。

「可愛いねそのアクセ。どこの？」

「美味しい？良かった、奈央ちゃんのために色々調べたんだよね。こことかも好きそう」

「こういうの似合いそうじゃない？ほら、やっぱり」

「はは、かわいいー」

「…目、閉じて？」

そうして結局、奈央は朔の手に堕ちて処女を散らしたのである。

初めてを朔に捧げた日のことを思い出していた奈央は深い深いため息をついていた。携帯のトーク画面には朔からの連絡が来ていて、今度家に来ないかとお誘い。

朔は一人暮らしをしていて、こうして時々奈央を家に誘う。最初はラブホが多かったが、数ヶ月前から家に呼ばれるようになっていた。家に行くときすることは基本セックスだけ。時々外でご飯を食べたりお出かけしたりすることはあれど、付き合っていない。完全にセフレの関係になっているのを自覚していてなお関係を切ることができなかったのは、奈央が朔を好きになってしまったからだった。

朔からしたらただのリップサービスだと分かっているとしても、純粋な奈央は

それを大事に大事に受け取って心の中にしまい込む。それを繰り返して、気づいたら好きになってしまっていた。

「私のこと好きになってくれるわけがないのに：栞の言う通りそろそろ諦めない」と

セフレになってから一年が経とうとしていた。身体の相性がいいのか、それとも奈央の反応が良いからなのか定かではないが、朔と奈央の関係は一夜限りではなかった。定期的に誘いの連絡が来て、大学内でも顔を合わせれば話すくらいの関係。

「奈央も成人してる大人だしそこまで口出すつもりないけどさ、奈央がずっと傷ついてるのはやだよ。しんどいならもう離れた方がいいと思う。奈央にはもつといい人絶対いるもん」

朔との関係や自身の気持ちを告白された時、栞はそれはもう頭を抱え

た。それでも今まで恋愛のれの字も知らなさそうだった奈央が幸せそうに話をするものだから、強く引き留めることが出来ていなかった。

しかし最近それも落ち着いてきたようで、栞は遂に奈央へ諦めるよう伝え、それを受け止めた奈央は「どうやって諦めるか」を模索するようになっていた。

「どうしたの奈央ちゃん、元気ない？」

「えっ、そんなことないです！元気ですよ！」

「そっか、良かった。ベッド行こ。最近会ってなかったから奈央ちゃんチャージしたい」

手を引かれて朔のベッドに押し倒された奈央を上に乗り上げた朔がぎゅうっと抱きしめる。柔らかい印象の割には背が高く筋肉も程よく付いてい

る朔の身体に包まれ、奈央はきゅっと目を瞑った。

「まだ慣れないんだね、顔真っ赤で可愛い…食べちゃお♡」

「んひゃっ、う…んっ♡んうう♡」

真っ赤な林檍のような顔をしている奈央の頬にちゅう♡と吸い付いて甘噛みする朔に驚いた奈央の唇に、すかさず朔の舌が入り込む。ぐちゅぐちゅ、と舌が擦れる感覚に奈央の瞳が滲んだ。

最初はうまく出来ていなかったキスも一年かけて教え込まれ、きちんと鼻で呼吸しながら舌を絡めてくる奈央に朔の目が細まる。服を握っている奈央の手を取ってベッドに押さえつけ、耳にキスをする、奈央の細い指が朔の手の中で震えて絡まった。

「服脱がすから腰上げて。首に手回していいから」

「ん、はい…っ」

朔の手によってするすると服を脱がされ、あっという間に裸になった奈央は腕で胸を隠そうとするが、朔にその手を取られてその指にキスが落とされる。

「隠さないで、綺麗だから。このまま俺のことだけ見てて…♡」

「ひう♡やつんうう…♡」

朔の形の良い唇が開いて、そこから覗く舌が奈央の胸をゆっくり舐め上げた。乳首の周りを舌の先端がくるくると移動すると、柔らかかった乳首が芯を持って勃起始める。それをピンツ♡と弾かれると奈央の背中が仰け反って、朔に乳首を押し付ける体勢になってしまう。

ちゅう♡ぢゅうう♡ちゅっ♡ちゅっ♡じゅる♡ちゅうう…♡

「んあっ♡せんぱ、あ♡ふう♡んうう♡」

「っは…声かわいい…♡もつと聞かせて♡」

朔は舌なめずりをして奈央の乳首にしゃぶりつき、もう片方の先端を摘みながらこりこりっ♡と捏ねた。奈央の気持ちいい触り方を熟知した迷いのない快感の与え方に奈央の思考が蕩けていく。

服を脱ぎ去った朔の身体が奈央に晒されると、奈央はもぞもぞと足を擦り合わせる。こんなに綺麗な人が自分の身体に興奮している、という事実
に背徳感のような感情が奈央の背筋を駆け抜けた。

「ねえ今日何の日分かる？」

「へっ？」

「今日はさ、俺と奈央ちゃんが出会ってから一年記念日♡」

そう言いながら朔は奈央の足を開かせて、そこに顔を近づける。乳首への刺激で既に濡れそぼっているまんこはひくひく♡と朔を誘っている。

（ただのセフレなのにそんなことまで覚えてるんだ…すごい、こういう所

が人を寄せ付けるんだろうな…)

関係を持ってからの朔の印象はただの遊び人ではなかった。奈央との出会いや誕生日など、たくさんの人と関係を持っているとは思えないほど朔は記憶力が良くそれらを忘れられたことがなかった。そういう細やかな部分や数ある中の一人である奈央に対してずっと優しく紳士的で、横暴な対応をされたことも奈央が嫌がることをしたこともなかった。奈央もそういう所にまんまとハマって好きになってしまったのだから、朔の魅力というのは際限がない。

そんなことを考えていた奈央を足の間から見上げていた朔は、心ここに在らずの奈央にももちろん気づいており、意識を戻すように太ももに吸い付いて舌を這わせた。

「ひゃっ♡」

「余計なこと考えないで俺に集中して？一年だからさ、そろそろここ舐めさせてよ♡お願い♡」

「な、だめ、ですっ！それは、」

「まだダメなの？ここ以外は全部舐めてるのに…」

奈央のまんこを親指でクイツと広げて剥き出しになったクリにふう♡と息を吹きかけると、奈央の身体がビクツと反応し、垂れた愛液が朔のベッドを汚す。

セフレになってから今日まで奈央は朔にクンニされることを嫌がってさせたことがなかった。最初は今よりも淡泊なセックスで、キスも少なく朔が奈央の身体に舌を這わせることもほとんどなかったが、最近になってなぜか増えたキスや何度もお願ひされるクンニの許可に、奈央自身も困惑していた。

「だめっ絶対だめです、お願い…」

「…もう、その顔でお願いされたら無理やりできないの分かってるでしょ。しょうがないなあ」

顔を上げて奈央の額にキスをした朔は指をまんこに這わせて愛液を掬い取りクリに擦り付けた。ピクピク反応するクリを指で捕まえて上下に扱くように動かすと、奈央の腰がへこっ♡と上がった。

ぢゅこ♡ぢゅこ♡ぢゅこ♡ぢゅこ♡ぢゅこ♡ぢゅこ♡ぢゅこ♡

「きやうう♡…んあっ♡ぐ…♡」

「クリ横弱いよねえ♡皮と一緒に思い切りぢゅこぢゅこ♡ってされると腰へこ止ままないの、可愛い♡」

クリを刺激しながら奈央の唇を奪い、舌を吸い上げると朔の口内で奈央が甘い悲鳴をあげる。涙を滲ませながら必死に舌を絡めてくる奈央に朔の

瞳もドロつと蕩けた。

朔の指がどんどんスピードを上げていき、奈央のクリがピクピクツ♡と震え始めると、朔は奈央の耳に唇を寄せ周りに舌先を這わせながら息を吹きかける。シーツを握る奈央の手が絶頂間近を知らせ、部屋に響く嬌声が一気に甘さを増した。

「ひう♡せんぱ、もっ♡んうう♡♡」

「うん、いいよ♡一回♡こっか♡指このまま動かしてるから好きな時に♡っていいよ♡」

「おんっ♡イツ、きゅう♡だめっ♡いちやああ♡…っ♡んうっ♡」

絶頂を迎え腰を震わせている奈央の額に口付けながら、朔は指を滑らせまんこの縁をくるくるとなぞった。赤くふつくらとしたまんこは少しの刺激にも反応して口を開き、愛液を溢れさせている。

指先をつぶ…♡とまんこに挿入しゆっくり奥まで進めたあと、ナカを広げるようにぐるぐると指を回すと、少しぷっくりとした箇所当たった。そこだけを重点的にぐちぐち♡としつくく捏ねると、奈央の太ももがビクツと震えまんこが収縮する。

「やっ♡そこだめっ♡だめですぐ♡すぐイっちゃ、ああ♡」

「ナカ柔らかか…♡初めての時は指一本でもキツかったのに今はこんなふわぬるぬるで、もう指三本も飲み込んでるよ♡気持ちよくなれて偉い偉い♡またイって？イくところ見せて♡」

三本の指を飲み込んでいるまんこは出し入れするたびにぶちゅっ♡ぶちゅっ♡と愛液を飛び散らせ、きゅうきゅう指に吸い付いて自らGスポットを擦り付けている。

朔の指の動きに連動するように痙攣するまんこはすぐに絶頂の準備を始

め、奈央を押し上げていく。

ぶちゅ♡ぶちゅ♡ぐちぐちぐちぐち♡ぶちゅ♡ぶちゅぶちゅ♡

「ひっおあゝ…♡♡♡いく♡♡もういく…うう♡♡」

「あ、イってる…♡ナカの痙攣伝わってくるよ♡ゴム付けるから一旦抜くね？」

腰をガクツと跳ねさせて絶頂した奈央はべしや、とベッドに落ちて荒く呼吸する。ゆっくり抜かれた指は愛液でべたべたになっており、それを見た朔の喉がごく、と動いた。口元に持っていて舌を出そうとした朔の腕をすんでのところで奈央が掴む。

「だめって、言いましたっ」

「あれ、バレちゃった。別にこれくらい良いでしょ？だめ？奈央ちゃんの味知りたい…♡」

「汚いからダメですっ！先輩最近変です…！」

「変かなあ…奈央ちゃんに汚いところとかないし俺は今まで通りだと思うけど、まあまた今度気づかれないようにするよ♡」

「まずしようとしなくてくださ、きやつあ!？」

起き上がっていた奈央の腕を掴んでベッドに再度押し倒した朔は、ベッド傍のコンドームを素早く装着してちんぽを押し付けた。ぐちゃぐちゃのまんこは押し付けるだけでくぱくぱ♡と亀頭を飲み込もうと開閉し、亀頭がクリに擦れる度、奈央の腰がそれに合わせるように動いて甘い声が漏れる。

「擦り付けるだけで気持ちいい♡もう挿れる、ねっ♡」

「んう♡ひっあああゝ…ッ♡♡奥当てちや、だっえ♡あっ♡あんっ♡」

「ははっもう子宮当たった♡つく♡もうそんな締め付けないで、すぐイッ

ちゃったら勿体無いでしょ…っ♡」

子宮口にぐうう…っ♡と先端を押し当てながら奈央の膝を抱えて肩に足を乗せ細かく腰を振ると、奥だけを刺激するような動きになる。奈央はこの動き方に弱く、背中を仰け反らせて逃げようとするのを足首をグツと掴んで阻止しながら朔はさらに動きを早めていく。

ぐっ♡ぐっ♡ぷちゅ♡ぷちゅ♡ぐぷう♡ぐぷう♡

「ひぐ♡きやうう…っ♡♡奥ばっかりやああ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

「可愛い声出てきたね♡もうイきそう？おまんこビクビクして俺も気持ちいい…♡」

「おう♡イクッ♡ひ？♡だめ、はやい♡おっ♡おんっ♡せんぱい♡んうう♡イっくうう…っ♡♡」

「ぐ、う…♡やば、俺もイク♡奈央ちゃんのせいで俺早漏になっちゃった

♡責任取ってね？はあ…気持ち♡イクイク♡」

ばちゅ♡♡ばちゅ♡♡ばちゅ♡♡ばちゅ♡♡ばちゅ♡♡

びゅ♡♡びゅるる♡♡びゅうう♡♡びゅ♡♡びゅう♡♡

「ひっおお…♡♡イツクうう♡♡っおひ♡♡ん♡♡ひっ♡♡」

肩にかけた奈央の足をしっかりと固定しながらばちゅばちゅ♡♡と腰を振りとくり一番奥に亀頭を押し付けながら射精した朔は、ゆるゆると動いて精液を出し切ってからゆっくりちんぽを抜いた。

ぬぽん♡♡とちんぽが抜かれたまんこはぐぱ♡♡ぐぱ♡♡と大きく開閉して白く濁った本気汁を垂れ流しながらビクビク痙攣している。「ひっ♡♡ひっ♡♡」と浅く呼吸している奈央を抱き上げた朔は浴室に向かって、予め溜めておいた湯船に奈央をゆっくり降ろした。

「ごめんね、奈央ちゃんが可愛すぎて激しくしちゃった♡♡」

「反省してないですその顔：もう、最近私のこと呼びすぎじゃないですか？他の子もいるんだから分散させてくださいっ身体もたないので！」

物分かりのいいフリをして、本当はしてほしくもないことが奈央の口をつく。それを言うってから少しだけ後悔した奈央は朔から目を逸らして湯船を見つめる。

朔のセフレになってから一年、他にも何人が続いているセフレがいることは知っていた。そして、朔と初めて会った日に朔があの子に言い放ったことも覚えていた。

（私ばかり好きなのは分かってるけど、あんなこと言われたら苦しすぎるし、最後はちゃんと終わらせたいし）

「他の子？あゝ：最近全然会ってないな。奈央ちゃんしか家呼んだことないし、奈央ちゃんだけでいいかもって思ってるから、俺」

「へ、」

「最近奈央ちゃんばかり呼んでるからか知らないけどしつこいんだよね。だったら奈央ちゃんだけにした方が良くない？面倒くさいの嫌いだからさ」

そう言つてニコツと奈央に笑いかける朔に、奈央の心はスツと冷えていく。言外に「お前は面倒くさいことするなよ」と言われているような雰囲気、湯船の中で膝を抱えてプルプル震えている奈央の髪を朔の手が撫でた。

「ゆっくり浸かってきてね。タオルとか着替えはいつものところにあるから」

「は、い…」

朔が浴室を出ていく音を聞いてから、奈央は湯船にブクブクと沈んでい

く。目を瞑って先ほどの朔が言っていた言葉を思い出す。

（報われない恋って、こんなに辛いんだ）

そんなことあるわけないと思いますが、奈央しか家に呼んでいないと言う朔に勝手に期待して、裏切られた訳でもないのに勝手に傷つくことに苦しみ募る。

滲んだ涙が湯船に溶けていって、息苦しくなってから漸く顔を上げた奈央はパンつと両手で頬を叩いてから一度強く目を瞑ってから上を見上げた。涙はもう全部流れて視界はスッキリしている。

「もう、終わりにしよう」

今まで散々悩んでいたことが嘘のように奈央の意志はハッキリと決まっていた。報われない苦しい恋へ別れを告げる勇気を、奈央は遂に手に入れた。

いつもなら朔の服を着てそのまま泊まることが多かったが、その日の奈央は自分の服に着替えて帰宅した。「今日は帰る」と伝えた時に引き止めもせず了承する朔に、奈央は「やっぱり」と落胆したとともに、諦める理由が増えたことに少しだけホツとしていた。

自身の家に帰って友人の栞に連絡した奈央は、その電話で初めて声を上げて泣いた。慌てて奈央の家まで来てくれた栞と夜を明かし、奈央はやっこの恋に終止符を打つことを決めた。

その日から一週間、朔からの連絡はなく、また奈央から朔へ連絡することももちろんなかったため、特に何の事件も起きないまま奈央は平和な大學生生活を謳歌していた。

大学内では遠目で朔を見かけることもあったが、わざわざ近づくこともなく、いつもだったら「遠くから見ても輝いてるのさす国（さすが国宝の意）♡」と目を輝かせるはずの栞が明らかに萎えた顔をしていたため、奈央は驚いて栞の顔を覗き込んだ。

「栞いつもみたいにオタクしないんだね」

「オタクするって何よ動詞にするのやめれる？奈央のことあそこまで泣かせておいて変わらずオタクやってらんないよ。別に女泣かせなのはいいけどそれと奈央は別！友達だもん」

「さす友…」

栞のあまりの頼もしさに涙を滲ませた奈央は、一緒に朔のいる場所から離れるように歩を進めた。それを見つめている数多の瞳に気づかないまま。

一番の友達とはいえ栞と講義が丸かぶりなわけではなく、一人で授業を受けることも少なからずあった。授業を終えお手洗いへ向かった奈央は、トイレから出た後そこに待っていた数人の女学生と鉢合わせた。

他の場所は空いているのになぜ…？と思いながら横を通り過ぎようとした奈央の腕を掴んで壁の方に押し、周りを取り囲んだ女学生達は、奈央を見下ろして蔑んだように笑った。

「あんたが最近朔のオキニって子？」

「えっ？」

奈央を品定めするように頭から爪先までじろじろと見回す女学生たちの視線に奈央は肩を竦めて目を泳がせた。

（オキニ、なわけないよね。ただのセフレだったんだし、オキニになれるならなりたかったけど：いや！諦めるんだからこんなこと考えちゃダメ！）

「最近朔が全然遊んでくれなくなっただよね。理由聞いたら奈央ちゃんいるから〜ってさ。もしかして彼女とかじゃないよね？あんたみたいな普通の女、朔に釣り合うわけないんだし。前までの朔だったら一人に絞ることなかったのにさ、朔は皆のものなの！独り占めしていいと思ってるの!？」

どんどん大きくなる声に奈央は肩を震わせて俯いた。どう考えても勘違いで、ただ面倒くさくない都合のいい女が奈央であっただけ。そう思っ

いる奈央は、言い返そうにも大人数に取り囲まれている状況に萎縮してしまい、中々言葉を紡げずにいた。

「何とか言いなさいよ！朔のこと独占しようと思ってるなら身の程知らずもいいところなんだけど!？」

「身の程、を知ったので…っ」

「は？」

「私は先輩の特別にはなれないって分かったから離れようとしてるんです！私がお気に入りになんてなれるわけないです、先輩がそういう人だつて、皆さんも知ってるんじゃないですか」

脳裏に浮かんだ朔の言葉に釣られるように、遂に奈央は声を上げた。自分が特別になれるわけもなく、朔を独占できるわけもない。それが今までどれだけ苦しかったか。やっと諦めようと思っていた矢先のこの状況に、

奈央の心はズシツと重くなる。

（言われなくてももう止めるのに、なんでこういう時に限ってこんなこと
言われなきゃいけないの：っ）

抑えきれなくなった涙をそのままに、トイレを飛び出した奈央は一人に
なれる場所を探して走った。

ドンッ

「きやつ！」

「つと、大丈夫：って奈央ちゃんだ。どうしたの、泣いてる？」

角から来た人物に止まることができずぶつかって転びそうになった奈央
の腕を掴んだのは朔だった。後ろにはいつも通り知らない女の子がいて、
朔を見つめている。泣いている奈央に気づいた朔は、奈央の手を引いてど
こかに向かおうとした。

「え、ちよつと朔くん！どこ行くの？今から遊びに行こうって言ったじゃん！」

「ごめんそれナシ。奈央ちゃんの話聞く方が先だからまた今度ね」

「はあ!?ちよつと、朔くん！」

声を荒げて引き止めようとしている女の子を無視して朔は奈央の手を引く。泣いてしゃくり上げているせいでうまく話せない奈央は手を引かれるまま朔に着いていった。

「この教室四限は空いてるんだよね。だから安心して」

教室に入り奈央を椅子に座らせた朔は、前にしゃがみ込んで奈央を見上げた。未だにポロポロと零している奈央の涙を拭おうとした朔の手を、奈央はパシッと払い落とした。今まで奈央に抵抗されたことがほとんどない

朔はポカンとして奈央を見つめる。

「どうしたの奈央ちゃん、何かあったんだよね？俺のせい？」

今まで余裕そうな顔でいつも綺麗な笑みを浮かべていた朔の表情が初めて崩れたのを見て、奈央は涙を拭って一度深呼吸をした。声は震えているが必死に言葉を紡ごうとしている奈央の声を朔はじっと待っている。

「先輩のせい、じゃない、です。私のせいでっ」

「奈央ちゃんが悪いことしたの？それでそんな泣かないでしょ？」

「私が、先輩のこと、す、好きになっちゃったから……っ」

奈央が遂にその言葉を口にした途端、朔の動きが止まる。朔の顔を見ることができず俯いた奈央はもう全部言っただれ！という気持ちで捲し立てる。

「私が、先輩のこと好きになったら、先輩の嫌いな割り切れない人になっ

ちやうから黙ってて、ごめんなさい」

「は、ちよつと待って奈央ちゃ、」

「でももう辞めます、先輩のセフレも、先輩のこと好きでいるのも辞める、から：今まで、ありがとうございました。綺麗に終われなくて、ごめんなさい」

ガタツと椅子から立ち上がった奈央は教室から走って飛び出した。後ろから「待って奈央ちゃん！」と言う朔の声が聞こえた気もしたが、奈央はそのまま振り返らずに走りながら授業を終えたであろう栞に電話をかけた。

『もしもし奈央？連絡ないから心配した！今どこ？』

「栞いいい：今別館のそこ走ってるよお：」

『え、泣いてる？あんたまさかつ』

「先輩に会って全部終わらせてきた、けどその前にも色々あって全部聞いてほしいから向かうねええ…」

『うん、オッケー。とりあえず転ばないようにゆっくり来な』

栞との電話を切った奈央は走っていた足を緩めてゆっくり歩き、栞の待つ場所へ向かった。栞にことの顛末を話すと「そいつらの顔覚えてる？

殴ってくる」と拳を掲げたものだから、奈央は泣き笑いしながらそれを止め、全てが終わったことへの安心感と解放感で胸を撫で下ろしていた。

朔の連絡先をブロックして、トーク画面も削除する。朔に行ったカフェの写真など朔を思い出しそうなものは全てを消去する。

「よく頑張った奈央！これからまたいい男探そう！奈央なら絶対すぐ見つかるよ」

「うん、ありがとう栞」

最初の頃葉が言っていたように、奈央はこれを思い出にすると決めた。奈央から関係を断てばもう二度と会うこともない。全てを過去のものにして次に進むため、奈央は朔への恋心を捨てた。

（ここ来るの久しぶりだな…）

春、朔との関係を経つてすぐに長期休みとなり、そのまま朔の代が卒業して奈央は大学四年生になった。朔への恋心を捨てたとはいえ朔を思い出しそうな場所は避けていた奈央は久々に渋谷に降り立った。あの日と同じようによく晴れた日で、人も多い。行き交う人の波に押されながら、一人で散策をしていると、とあるカフェが目に入った。朔とデートで初めて行ったカフェだった。

「…結局思い出してるの、バカじゃん私」

そう言って苦笑した奈央はその場を離れ、人通りの少ない路地へ入った。表通りの喧騒が遠くで聞こえ、人が少ない分少し涼しい路地は奈央の心を落ち着かせる。

そんな中ゆっくり歩いていた奈央の横に、急に車が停まった。特に詳し

くない奈央でも分かる大きな高級車は、奈央の真横ぴったりに停車している。スモークフィルムが貼られているのか中の様子は視認できない。

いきなり自身の横に停まった車に立ち止まった奈央は、ドアが開いていくのをただじっと見つめていた。すると、完全に開き切る前に隙間から伸びた手が奈央の腕をガツと掴んだ。絶対に離さないという意志を感じる強い力に表情を歪めた奈央が咄嗟に顔を上げる。

「っえ：せんぱ、い：？」

「久しぶり奈央ちゃん。またここで会えるなんて運命かな♡」

「なにっ離してくださいっ、やだ、あ!？」

腕がグイッと引かれ、奈央は車内に引き込まれた。朔の胸に倒れ強く抱きしめられた奈央の後ろでドアが閉まっていく音が響く。運転手へ「出せ」と指示した朔の声と共に車が静かに動き出した。

朔の腕の中でジタバタと暴れても一向に腕が解かれる気配はない。胸を押して離れようにも、背中側はドアで動いている車から飛び降りる勇氣は奈央にはない。

「もう、暴れないで奈央ちゃん。頭ぶつけちゃうよ？」

「離してっ！なんでこんなことするんですか!？」

「なんでって…奈央ちゃんを俺のお嫁さんにするためだよ。準備に時間がかっちゃって迎えに来るの遅くなっでごめんね？俺、離れていく人追いかけるの初めてだから手間取っちゃった」

「お嫁、さん…？何言って、」

「俺奈央ちゃんの優しさに甘えててさ、奈央ちゃんが俺から離れて初めて気づいたんだよ。俺、奈央ちゃんのことを好きなんだって」

奈央の両頬を包んで顔を上げさせた朔はじつと奈央の瞳を見つめてそう

言った。吸い込まれるような綺麗な瞳が奈央だけを見つめ、甘く囁かれる状況に傾きかけた奈央の心がすんでの所で留まる。

『好きって言ったのはただのリップサービスだよ、普通に考えたら分かるでしょ。そんなことも割り切れない子とは付き合ってられないんだよね』

初めて会った時に朔がセフレの女に言っていた言葉が脳裏で思い起こされたからだった。奈央は深呼吸をして、笑って朔を見つめた。

「もうそんなリップサービスで騙されやすいですよ、私。お嫁さんとか言うからびっくりしちやいました…」

「は、違うよ。俺は本気で奈央ちゃんが好きだから」

「面倒くさくないセフレが恋しくなったとかですか？先輩ならすぐ作れるんですから今は我慢してください」

「だから、俺は奈央ちゃんしか好きじゃないしセフレはもう全員切ってる

よ。奈央ちゃんしか抱きたくないから」

あまりにも真剣な目でそう伝えてくる朔に奈央の顔が熱を持つ。それを隠すように俯いた奈央は、朔の胸を押してできるだけ距離を取ったまま自嘲した。

「私は先輩のこと好きでした、先輩が他の女の人と一緒にいるの嫌で、独り占めしたいって思っちゃうこともあつて」

「うん、俺も奈央ちゃんにそう思ってる」

「違います。先輩は面倒くさくない都合のいいセフレだった私が恋しくなってるだけです。私「が」いいんじゃないかって、私「で」いいって思ってる。だから私の好きと先輩の好きは、違います」

「…そう、分かった」

車が大きな門を潜りゆつくりと停車し、朔側のドアが運転手によって開

けられた。奈央の手を引いて一緒に車を降りた朔は奈央の身体を抱き上げて玄関を上がった。

「なっ!? 下ろしてっもう帰ります!」

「下ろす訳ないでしょ。最初から帰すつもりないし」

「でもさっき「分かった」って言っ」

「うん、分かったよ。奈央ちゃんが俺のこと一切信用してないってことがよく分かった。俺の今までの行動がそうさせてるのも理解はしてるけど、俺の気持ちを分かってくれない奈央ちゃんには、これから時間をかけて教えてあげないといけないから」